K. レオンチェフの「回心（神秘体験）」とその意味について（上）

清　水　昭　雄

《抄録》

後に「反動思想家」と呼ばれることになるロシアの外交官・作家，コンスタンチン・レオンチェフはサロニキの領事であった1871年７月にいわゆる「回心（宗教的神秘体験）」を経験した。この経験は彼の人生を大きく転換させた。また，それは彼の「反動思想」の確立を促すことにもなった。

本論の第一の目的は，レオンチェフのこの回心を，近年活況を呈しているレオンチェフ研究（特に決定版ともいえる全集がロシアで刊行中であることが重要である）の下で再検討することである。第二には，刊行中の全集において新たに発掘されたレオンチェフの著作等を併せて検討することによって，回心前後の彼の思想・美学に具体的に踏み込んで，回心が彼の思想の発展過程において持った意味の概要を示すことである。

本稿は上記論文の前半部分であり，レオンチェフの回心前の生活・心境を詳しく辿った第１章と，回心について彼自身が語ったり，書いたりした記述から回心の内容を考察した第２章から成っている。回心前後の思想や美学上の見解を扱った第３章と，回心が彼の思想において持った意味について考察する第４章は，本紀要の次号に掲載される。

キーワード：K. レオンチェフ，回心，宗教的神秘体験

「あなたはフランス語の“Cherchez la femme”という格言を聞いたことがあるでしょう。生活のいかなる真面目な事柄においても『女を捜せ』ということです」
（ローザノフ宛レオンチェフの晩年の手紙から，1891年８月14日）

《はじめに》

1871年７月，当時サロニキの領事であったK. レオンチェフは，数年来不調をきたしていた体調がひどく悪化するのを感じた。彼はそれをコレラの罹患によるものと考え，早すぎる死への強い恐怖にとらわれた。恐怖の中で身近にあった生

神女（聖母）のイコンに気づき，また同時に生神女の存在と威力を感じた。そして，生神女に平癒を祈ると，不思議にも祈りが叶った。危機を脱したレオンチェフは，治癒のあかつきには修道士になります，という祈りの言葉に従い，アトス山に向かった。その後職も辞し，修道生活を目指すことになる。しかし，厳しい修道生活に耐えきれないこともあり，結局は修道士になれず，ほぼ20年間俗世と修道院を行き来し，実際に剃髪し修道士になったのは死の数カ月前のことであった。

これがレオンチェフのいわゆる「回心」と呼ばれる宗教的神秘体験について通常言われるところのものである。回心後急速に彼の反動思想は明確化され，主著『ビザンチズムとスラヴ諸民族』（1874～76年）が生まれた。回心がこの過程において大きな意味を持ったことは間違いがない。

近年ロシアにおいてレオンチェフ研究は活況を呈している(注1)。特に決定版ともいえる全集が2000年から刊行中であり，そこには新たに発掘されたレオンチェフの論文等も含まれ，今後発刊予定の書簡の巻にも多くの期待が寄せられている。また，わが国においてもレオンチェフ研究は進展しており(注2)，本邦初めてのレオンチェフに関する紹介書が最近刊行された(注3)。

本論はこのような内外の研究状況の下で，レオンチェフの回心を再検討し，さらに回心前後の思想・心情・美学に具体的に踏み込み，回心が彼の思想の発展過程において持った意味の概要を示そうとするものである。本稿は上記論文の前半部分であり，レオンチェフの回心前の生活・心境を主に考察した第１章と，回心について彼自身が語ったり，書いたりした記述から回心の内容を考察した第２章から成っている。回心前後の思想や美学上の見解を扱った第３章と，回心が彼の思想において持った意味について考察する第４章は，本紀要の次号に掲載される。

引用が刊行中のレオンチェフ全集（*Полное собрание сочинений и писем в 12-и томах*, СПб., 2000~）からなされる場合は，文末に巻の番号をローマ数字で示し，ページ数をアラビア数字で示した。

第１章　「回心」に至るまでのレオンチェフ

レオンチェフの「回心」といえば，晩年のローザノフ宛の手紙で彼が述べたものを基に語られるのが普通である（それ故，本稿の末尾に付録として訳出した）。その手紙の中で，レオンチェフは，この不思議な体験をもたらした２つの前提と

２つの原因を挙げている。２つの前提とは，「最新のヨーロッパ的生活の精神と形態に対する長期に渡る哲学的な憎悪」と「正教の外的な諸形態に対する何か美的で子供じみた忠誠」であり，２つの原因とは，「心の最深部におけるショック」と「最も危険で思いがけない病気とその時に死んでしまうという恐怖」であった。そして，この「心の最深部におけるショック」の後に，「あなたはフランス語の“Cherchez la femme”という格言をきいたことがあるでしょう。生活のいかなる真面目な事柄においても『女を捜せ』ということです」という言葉が添えられている。

レオンチェフ自身によって回心を構成すると主張されるこれらの４つの要素とその絡み合いは，考えれば考えるほど，興味深いものになるのだが，ここではそれには立ち入らず，４要素との関係で，本稿で何が検討されるのか簡単に述べておきたい。まず，２つの前提に関しては，主として，思想・美学を扱う次号で問題とする。次に，病気と恐怖。これは回心の現象面の主たる出来事であり，本稿で検討する。しかし，本稿が扱う中心的問題は，「心の最深部におけるショック」に関すること，つまり，レオンチェフ自身がそれに付した付言，「女を捜せ」に関することである。レオンチェフ自身がヒントめいたものを与えながらも（当然思い浮かぶのは la femme ＝生神女であるが），明確には語れなかった「心の最深部におけるショック」と関係したことについての考察である。

まず，回心に至るまでのレオンチェフの状況を見ておこう。

レオンチェフは，母の強い意向で医者にはなったものの，作家になりたいという長年の強い思いを断ち切れなかった。また，軍医として加わっていたクリミア戦争の終結によって，戦争と東方へのロマンチシズムが満たされなくなったこともあって，1857年８月10日に軍医の職を辞し，モスクワで作家として身を立てようと試みた。しかし，それも叶わず，1858年に再びニージニー・ノブゴロドのローゼン男爵家の家庭医となった。医者から足を洗うことができなかったのである。しかし，彼はその地での退屈な生活にやはり飽きたらず，作家を目指す再度の挑戦を今回はペテルブルグで敢行することになった。だが，それでも展望は開けなかった。かつてクリミアでの軍医時代に知り合ったエリザベータ・パーヴロヴナ・ポリートヴァ（字は読めるものの文章の書けない素朴な，しかし美貌の商家の娘）と1861年に結婚していたこともあって，レオンチェフは再度身の振り方を考えなければならないことになったのである。

1）外交官

ペテルブルグでの生活に嫌気がさしていたレオンチェフは，1861年初頭にペテルブルグで旧知のM.A.ヒトロヴォ（翌日トルコ［マケドニア］に領事として赴く予定であった）と偶然話をすることになった。そして，彼は外交官として東方で働きたいと思うようになる。ヒトロヴォの語る東方の生活に惹かれたのである。ここでも東方に対するロマン主義的な関心が彼を動かしたのかも知れない。その後外務省アジア局副局長ストゥレマウーホフと知り合いであったレオンチェフの兄ヴラジーミルがそれを後押しすることになった。妻を領地クジノヴォに残し，単身ペテルブルグに赴き，外交官試験の準備に励んだレオンチェフが試験に合格し，アジア局に事務官として任命されたのは1863年２月11日のことであった（この背後にはローゼン男爵がN.N.ズーボフ伯爵にレオンチェフを紹介し，伯爵が当時外務省アジア局長であったN.P.イグナチエフ将軍に彼を推薦したことがあった）。彼の外交官としてのキャリアはここに始まる。

約９カ月間の国内勤務を経た後，レオンチェフは国外での最初の勤務地クレタ島カンディアに領事館書記・通訳として赴いた。

ここで回心を体験する1871年７月までの彼の勤務地と役職を以下に挙げておこう。

クレタ島カンディア（領事館書記・通訳）［1863年10月～1864年夏頃］
アドリアノープル［現在エディルネ］（領事館書記・通訳）［1864年８月～1865年12月］
ベオグラード（総領事館書記・通訳）［1865年12月～1866年１月］
アドリアノープル（領事館書記・通訳）［1866年１月～1867年４月，この間４カ月間休暇でコンスタンチノープル］
トゥルチャ［現在ルーマニア領］（副領事）［1867年４月～1869年１月］
イオアニア［現在ギリシャ領］（領事）［1869年１月～1871年４月，この間1870年に熱病でアルタ市とコルフ島に４カ月ほど居住］
サロニキ（領事）［1871年４月～回心（７月）］（サロニキへの転出はレオンチェフの体調を気遣った駐トルコ大使イグナチエフの配慮によるものであった）。

レオンチェフの外交官としてのキャリアは以上のように順調なものであった。レオンチェフの生涯に関する基礎資料の作者，コノプリャンツェフによれば，回心の前まで外務省内での彼の評価は高く，ウィーン駐在ロシア大使ノヴィコーフはレオンチェフにボヘミア総領事の地位を約束していた(注4)。レオンチェフ自身

この順調なキャリアについて「あれ程うまく行っていた外交官としてのキャリア」と述べている（付録として訳出したローザノフ宛の手紙参照）。このようなことは，レオンチェフのように特別な「ひき」のない者にとっては異例のことであったという(注5)。

2）体の不調，精力の衰え

さらに回心に近い時期に絞って経過をよく見てみよう。すでに述べたように，回心はレオンチェフの体調の急激な悪化を契機として生じたものであった。それ故，まずレオンチェフの体調について考察する必要がある。そこで当然注目されるのは1870年の「熱病」である。既に記した職歴における記載は熱病のために南のアルタ市，さらにコルフ島に一時居住したのが1870年ということであって，熱病そのものは1869年中に発病している。このことを1869年12月10日付けの甥のV.V. レオンチェフ宛の手紙で確認することができる。「君，僕はずっと病気です。熱病があまりにも僕を疲弊させるので，馬に乗れるだけの力が出次第，イオアニアを去るつもりです」(注6)。コノプリャンツェフはこの「熱病」の主因をイオアニアの気候への不適応に見ている。「レオンチェフの弱い肉体はこの地の気象条件に耐えられなかったのである」(注7)。新しい任地イオアニアでレオンチェフは初めての領事としての仕事を精力的にこなした（もっとも仕事はそれ程大変なものではなかった）。さらに彼の止みがたい欲求の対象である小説執筆にも力を注いでいた。1869年には２篇の短編「ペムベ」，「ハミドとマノリ」が，1870年には短編「コスタキ」，中編「アスパージヤ・ラムプリジ」が書かれている。気候への不適応，職務と自分の生き甲斐（小説）への献身から来る疲労，これらがまず「熱病」の原因であったと考えられるのである。

しかし，友人のグバストーフ宛の1869年10月15日付けの手紙（コノプリャンツェフもその一部を引用している）をよく読んでみると，ある重要なことが浮かび上がってくる。まず，少し長いが，現在公刊されている全文を引用したい。

「・・・要するに心の憂い（トスカー）が僕の今までの人生で経験したことのないようなものであるということだ。それは何か新しい憂い，静かな憂い（спокойная тоска）ともいうべきものだ。僕は，君がツァリグラードで僕に言ったあの時期に，自分が突入したのではないか，と恐れている。君はあの時こう言ったんだ。『年をとって何もかもが嫌になったような君は見たくないね。君は年甲斐もなく女の尻を追いかけるだろうよ』。この言葉を思い出して，僕は溜

息をつく。ああ，どれほど溜息をつくことか。信じてくれ，**僕にはこれは耐えきれないほど辛いのだ**。イオアニアのせいだとは思わないでくれ。主因は僕の**内面生活（内的な生命）**にあるのだ。人生で初めて僕は物質的な快適さ以外の何物も望まないようになりつつある自分を恐怖とともに見ている。物質的な快適さは，手や足があることと同じで，もしないならばさぞ辛いだろうと思わせることで僕を喜ばせる。しかし，手や足があるからといって，それだけでは嬉しくないのだ。**君は，一時のことだ，と言うだろう。そうあって欲しい，そうあって欲しい・・・**（強調引用者，また下線部分はコノプリャンツェフが引用で省いた部分）」(注8)。

本稿の筆者はかってレオンチェフの恋愛小説の分析からレオンチェフの一面を「性的人間」と規定した(注9)。その観点から見るなら，この手紙は非常に興味深い。ここで「内面生活（**внутренняя жизнь**）と述べられているものは，内面的な精神生活とも，また端的に性的な力と見なすこともできるからである。コノプリャンツェフの引用にはグバストーフの言葉とそれに対するレオンチェフの感想が省かれている（上記の下線部分）。そのため，コノプリャンツェフのこの手紙の解釈は，曰く，この手紙は1871年の回心の予兆である。それはレオンチェフの人生において「生の情熱的な享受の時期」が過ぎつつあること，それに替わって「倦怠のみならず，もしかしたら，懐疑，自分の罪深い過去に対する幻滅」が生じている。そしてその試練にレオンチェフは「何か罰する手のようなもの」を見ている。そして結論としてこう述べている。「このような気分の影響の下でイオアニアのレオンチェフの中に初めて修道院についての思いが現れた」(注10)。

コノプリャンツェフの解釈はレオンチェフの生涯におけるその後の展開を知る者の深読みであろう。「静かな憂い」やグバストーフの言葉（「君は年甲斐もなく女の尻を追いかけるだろうよ」）を思い出してのレオンチェフの「僕にはこれは耐えきれないほど辛いのだ」という表現，さらに物資的な快適さだけでは満足できない，つまり，もっと他のものが必要という言葉からして，レオンチェフが嘆いているのは，女を追い回せなくなった精力の衰え，あるいは女への関心が薄れてしまったことであると考えられる。「性的人間」であったレオンチェフにとって精力の衰えの意味は極めて大きかったと思われるのである。グバストーフ宛1875年１月15日付け手紙には「僕の健康状態は素晴らしい。しかし，・・・impotentia virilis（インポテンス）は，有り難いことに，確固としたものになった。大変うれしい，僕はこれを神の恩寵とみなす」(注11)とある。これは回心後，アトス等での修道生活の後のことである。だが，この手紙でも性の問題がレオンチェ

フにとって大きなものであったことを逆の形で示している。1869年の時点で「性的人間レオンチェフ」に最初の精力の衰えが生じ，彼がそれに脅威を感じたことは十分あり得ることだろう。

さらにこの「静かな憂い」を精神面だけで捉える解釈を退ける材料がある。それは以下で検討されるほぼ同時期にレオンチェフが書いたストラーホフ宛の手紙である。そこでの感情は決して落ちついた，平静な感情といったものでは全くない。正反対である。したがって，ここでの「静かな」や「落ちついた」と訳されるロシア語（спокойная）の意味は，女性に心が動かなくなった――精力（性欲）の減退――という意味と考えるべきではないか。

ここまで回心前のレオンチェフの体調，そして彼にとって大きな苦痛となったと思われる精力（性欲）の衰えについて述べた。

3）精神的苦悩

当時のレオンチェフが抱えていた精神的な苦悩を窺い知る材料をわれわれはニコライ・ストラーホフ宛の３通の手紙から得ることができる（1869年10月26日，1870年４月12日，1870年11月19日付けの手紙）。

ストラーホフ宛のこれらの手紙は当時のレオンチェフのおかれた状況に関して様々な興味深い情報をわれわれに与えてくれるが，ここでは後に生じる回心との関連で問題になると思われる部分（精神的苦悩の問題）に焦点を絞って検討しよう。また，回心前の当該期間内のレオンチェフの手紙としては，すでに見たグバストーフ宛以外では，今のところ，これらのストラーホフ宛の３通しか公刊されていないことも指摘しておきたい。

ではこれら３通の手紙から窺える苦悩とは何であったのか。それは，レオンチェフの当時の最大の関心事が，依然として執筆活動によって身を立て，一定の成功をおさめることであり，そしてまさにその夢が叶わないかもしれないという不安であった。この点をより詳しく見てみよう。

まず1869年10月26日付けの手紙である。そこでレオンチェフは，自分は東方に関する貴重な情報を持っているが，自分が書いた政治論文（「読み書き能力と民族性」）でさえも活字にならない現在，新しい論文を書く気にはならない，と当時『ザリャー（朝焼け）』の編集者であったストラーホフに非難とも，懇願ともいえない調子で泣き言を書き連ねるのである。なにより口惜しいのは「読み書き能力と民族性」が活字にならないことだ。「一体，あなたはそれ（論文――引用者）をペテルブルグで読んだことを忘れたのですか。あなたはその時僕にこう言った

ことも忘れたでしょう。『素晴らしい，素晴らしい。この論文はいただこう，特にこのロシア人，ブルガリア人，ギリシャ人等々の対比が素晴らしい。あなたはこういう例が手に入る国々で生活しているんですね。このことについてもっと詳しいことを付け加えて見ませんか』。馬鹿な僕は喜んで，信じたのです」(注12)。レオンチェフは書き直した論文がどうなったのかストラーホフを詰問して，こう書き継いでいる。

「あなたは分かりますか，分かりますか，分かりますか，ロシアから遠く離れた僕の状況の特殊性が。それは２つの全く相反した結果をもたらしうるのです。**もしこれから支持がないのなら，僕は孤独の中でくたばります**。もし，ロシアで支持が出てくるなら，僕ほどに東方についての貴重な情報をもたすことができる者はいないでしょう［強調――引用者］」。(注13)

３度繰り返される「分かりますか」に遠い異郷の地にあるレオンチェフの焦りがよくあらわれている。ちなみに論文「読み書き能力と民族性」は1870年の末に『ザリャー（朝焼け）』誌に掲載された。

1870年４月12日付けの手紙の書き出しも注目に値する。手紙を長く待っても，それがむなしいものであることが分かった，と書いた後にさらにこう続く。

「実際あなたが僕に何か書くようなことがあるでしょうか。もし，僕がツルゲーネフかその類の者であったなら，最後に会った時の彼の非常識な行いが正当にもあなたに軽蔑感を覚えさせとしても，あなたはもちろん急いで返事を書くことが礼儀正しい義務であると思ったでしょう。しかし，実際には，有り難いことに，僕はツルゲーネフではないので，僕の考えや作品があなたに引き起こすのは同情であって，軽蔑ではない」(注14)云々。ずいぶん僻みに満ちた書き方である。もちろん，こういうことが書けるのであるから，二人の仲はそれなりに良好なものであったろう（例えば，以前の手紙では送金を頼んでいる）。この手紙の引用部分の後ではレオンチェフは，二人の間に何もなかったかのように，自説を闊達に述べている。しかし，この手紙の冒頭のかなり屈折した劣等感めいたものの意味を見過ごすわけにはいかない。

1870年11月19日付けの手紙は，すでに述べたように現在まで書簡として公刊されている回心前のレオンチェフの最後の手紙である（実は今回の全集に収録されたレオンチェフに関するある思い出の中に重要な手紙の一部の写しが記されている。それについては以下で述べる）。それはレオンチェフの文学上の苛酷な運命についての告白である。

まず皮肉な感謝の言葉がある。「あなたの優しい言葉とあなたが書いたほんの

数行によって長い間僕を満たしてくれた力に感謝します。その数行の言葉によれば，年に10ページ印刷してくれるとのことだから，僕は２年後にはしっかりとした名声が得られるわけです」。この部分は上記の前の手紙の冒頭と関連している。そして，以下の告白が続く。

「実際，僕が，［一部判読不能――原文］，名声とまでは言わないにせよ，ある程度でも名が知られていないとしたら，それは奇妙なことでしょう。ツルゲーネフもカトコーフもドゥドゥイシキンもクラエフスキーもフェオクチストフも，そして多くのモスクワやペテルブルグの作家や学者が，僕が21歳から23歳の時に，それに値するとみなしたからです。口に出したばかりではありません。手紙でも書いたのです。そして，それらは僕の手もとに残っているのです」。そしてレオンチェフはそれを具体的に書いてゆく。その中からいくつか挙げてみよう。「ツルゲーネフは，（略），真に新しい言葉を期待できるのはトルストイ伯と僕からだけだ，と言った」。さらにもう一例，ドゥドゥイシキンはツルゲーネフに書いた手紙でこう述べたという。「彼（ドゥドゥイシキン）はそれ（レオンチェフの書いた喜劇）を読んで，泣きたくなり，作者がわずか21歳の若者であることが信じられなかった」。

そして現在のレオンチェフの心境である。「今僕の心は僕にこう言うのです。『僕がモスクワで22歳のとき，それにはまだ値しなかったのに，太陽は微笑んでくれた。もし，その半分でさえも今微笑んでくれたなら，僕は（一部判読不能――原文）を示すだろう』」(注15)。

この一連の手紙をどう読むべきだろうか。有能で，それなりに興味のある仕事で成功していたとはいえ，本人にとってやはり真の自分の仕事とは思えない外交官の職にある，40歳近くになっても成功していない文学中年（当時としては初老か）の悲しみと焦りを読みとるべきだろう。

文筆家として立てないかもしれないという不安，またそのためには不利な遠い異国にあるという思いが彼をひどく苦しめていたことを示す証拠がさらに存在する。今回の全集でその手稿から初めて公刊されたレオンチェフの姪のマリヤ・ヴラジーミロヴナ・レオンチェフの思い出に引用された1973年３月にクジノヴォの彼女に当てたレオンチェフの手紙である。

レオンチェフは当時コンスタンチノープルにいた。アトスで修道士になるという希望が結局叶わず，また体力がひどく弱っていたため，72年から73年の冬をその地で過ごしたのである。体力はかなり回復した。そして，73年３月の手紙である。「この地で私は将来や生きる手段，さらに罪を犯しているのではないかとい

うことについて，たえず**不安を感じています**。私は常に**不安なのです**。しかし，**決して息が詰まるということはありません**。なぜなら，書いたものはすぐに印刷され，やることはすぐに結果と答えが出るからです。私の話す言葉でさえもここでは田舎でそうだったように跡形もなく消えていくということはありません。ここでも仕事のないことは将来のことや年を取ること等よりも恐ろしいことです。しかし，ここには空気があります。現在は耐えうるのです。というのは，とにかく私にとって文学が（正教会を除いて――レオンチェフ）第一だからです（強調レオンチェフ）［Ⅵ(2)-113］」。

ここには，田舎，つまり彼の外交官としての任地での文筆活動がいかに孤立し，反響のない，手応えのないものであったか，それがレオンチェフにとっては「息が詰まる」ことであり，「空気」がないも同然の恐ろしいことであったことが語られている。さらに，この時期においても，レオンチェフにとって，正教会を除いて最も重要なものが文学であったことが明確に述べられている。信仰が問題にならなかった1869，70年においてはさらにそうであったろう。その時期，異郷の地にあって文筆家になる夢が完全に潰えてしまうこと，これこそがレオンチェフにとって最大の問題であったのは間違いがない。

レオンチェフが1869，70年に自らの文学的不運を嘆き，強い焦りを感じていたのは，その時期に至るまで彼が自分の文学的な才能に対して絶大な自信をもっていたからである。1875年に書かれた「私の文学的運命1874－1875年」はそのことを明白に語っている。彼は言う。若い時，自分にとってツルゲーネフ等の賞賛より，乗馬がうまいとか，女にもてるといったことが重要であった。それは文学的才能に関しては自信があったが，乗馬や体の美しさ，女性に与える好感度については不安があったからだ。それはちょうど戦争より自分のフランス語の詩の評判を気にしたフリードリッヒ大王のようなものだ。そしてこのことは外交官になってもそうであった，と［Ⅵ(1)-109］。

しかし，回心のあった1871年夏に向かって自分の運命に対する不安，苛立ちが高まっていたのはすでに見たとおりである。だが，レオンチェフは回心体験後，1875年の上記の「私の文学的運命1874－1875年」でこう書いている。「私の成功しなかった文学的な経歴に美学的な，あるいは実際的な誤りや過ちがあるとしても，私はそれを決して見いださないし，理解もしていないし，また将来理解することもないだろう。それはヨブが自分に対して大罪や大きな精神的な誤りを見いださなかったし，理解もしなかったのと同じである。21歳から現在まで私の人生はすべて思想と芸術に対する衷心からの騎士道的な奉仕に捧げられたのだ・・・。

そして私の中に最高の才能があることを判事たりうる人々は認めたし，認めてもいるのだ［Ⅵ(1)-125］」。

文学的な才能に対する自信の強さに比例して強まる現在のあり方についての不安と焦燥，これこそがレオンチェフをひどく苦しめていたのである。

以上の検討が示すように，当該の時期レオンチェフは肉体的にも，また自らのアイデンティティをかけてきた文筆生活における挫折の危機という点で精神的にも，ある転換をせまられていたといえるのである。

これらの危機に加えて，その時期と関係する，検討が必要な２つの問題がある。妻の発狂の問題と母の死の影響の問題である。この他にもレオンチェフが抱えていた借金問題があるが，それには触れないことにする。

４）妻エリザベータの発狂

1867年４月にレオンチェフがトゥルチャに赴任し，妻エリザベータをペテルブルグから呼び寄せ，二人が一緒に住むようになると，エリザベータに最初の発狂の兆しがあらわれた。1968年４月26日付けのグバストーフ宛の手紙にその点についての記述が見られる。「リーザが着いた。彼女には少し気を遣っている。病気がひどいのだ。もし，悪の根源が断たれないなら，彼女の病気は発狂にまでいたるかもしれない。お分かりでしょう，僕はこの時期とても楽というわけではなかったのだ。しかし，治る可能性を確信しているので僕の気持ちは落ちついている。当地では彼女の病気を嫉妬のせいにしている，しかし，それは正しくない。彼女がペテルブルグから着いた時，すでに病気だったのだ。ずいぶん智恵もついたが，馬鹿にもなったということだ。僕の私生活が単調だとは思わないでくれ。残念ながら，波瀾万丈なんだ」(注16)。

この時点でレオンチェフが楽観視していたにもかかわらず，妻の精神の病は一生癒えることはなかった（エリザベータはレオンチェフの死後，姪のマリヤが世話し，十月革命以後にオリョールで高齢で亡くなった）。もっとも妻は一挙に完全に発狂してしまったというわけではなく，病状はかなり正常な時を含めながら徐々に悪化し，退行化，幼児化していったようである。最終的には，体を清潔にしようとしても，それを嫌がり，そのためにシラミだらけという悲惨な姿になった。その様子がレオンチェフの後年の手紙で述べられている。「また妻に恐ろしい数のシラミが湧き始めた（体を洗わせないし，髪もとかさせず，髪はふさふさしているからだ），そのため頭は傷だらけ，首は湿疹だらけだ」（1885年７月19日付けグバストーフ宛の手紙(注17)）。

さて，ここで問題としたいのは，レオンチェフが自らの性的関係に帰された妻の発狂の兆しをどのように考えたのか，良心の仮借を感じたのか，さらにそれが回心と何らかの関係を持ったのか，という点である。現在までの資料によるならば，レオンチェフが妻の問題でひどく良心の仮借に苦しんでいた様子はない。彼の関心の中心はわれわれが今まで検討した点にあった。恐らく妻のことが当時すぐに大きな問題とならなかった最大の理由は，彼女の精神の病が急激には悪化しなかったことにあったと思われる。しかし，最初の発狂の兆しの後，つまり1868年の後半から回心（1871年７月）までの間に二人の間に深い対立があったことは間違いがない。レオンチェフ自身が後に手紙でこう述べている。「・・・われわれの間に後に（ずっと後，仲の良い８年間の生活の後に――レオンチェフ），今に至るまでそれを思い出すのが辛いひどい諍いが起こったのだが，それは，私のせいで，彼女のせいではない。その故に私は年老いて，現在の彼女の痴呆や不潔さ等々という十字架を背負っても，かくも穏やかで陽気でさえあるのだ。神が私を罰したのだ。有り難いことに，彼女は自分の状態が分からない。彼女の老年は私のよりはるかに陽気で，幸福で，屈託のないものだ」（1888年10月７日，アレクサンドロフ宛ての手紙(注18)）。レオンチェフは1861年に結婚したので，「仲の良い８年間の生活の後に」は1869年頃のことである。まずこのことを確認しておこう。次に，この「私は今に至るまでそれを思い出すのが辛い」や「神が私を罰したのだ」という言葉は，エリザベータの病のその後の悪化やレオンチェフが回心によって信仰の道を歩むようになったことに伴う表現であることを指摘しておかねばならない。それは決して1869年当時のレオンチェフの思いを伝えていない。おそらくはレオンチェフの性的な関係（女性関係と言わないのはレオンチェフ＝同性愛者説があるからである）に端を発した二人の諍いとエリザベータの発狂の兆し，これは当時のレオンチェフにとってまだそれ程恐ろしい問題ではなかったのである。この点について若干考察してみよう。

上記のエリザベータの発狂の兆しについての手紙のわずか２カ月程前に同じグバストーフ宛に書かれた手紙がある。この手紙の内容はレオンチェフの遊蕩に関する彼自身の証言として有名なものである。1868年２月29日付けの手紙である。

「アドリアノープルの詩情を十分に理解したいなら，僕の忠告を聴きたまえ。１）直ちに愛人，単純素朴なブルガリア女かギリシャ女をつくること，２）トルコ風呂に足繁く通うこと，３）トルコ女を手に入れるように努力すること，これはそれ程大変ではない，４）フランス人に注目されても喜ばないこと，バデッ

ティ夫人［アドリアノープルの豪商の妻］を誉めないこと，５）しょっちゅうツンジャ河の岸辺を散歩して，僕を思い出すこと，６）いつかトルコ人の憲兵を連れてバヤゼット・モスクを訪れ，キオスクの付近の草地で若いペフレバン（トルコ人の力士）の格闘を催すこと，これは素晴らしい」(注19)

これが２カ月前のことである。また，エリザベータの発狂の兆しについても，嫉妬のせいではなく，すでに病気だったと抗弁し，さらには「ずいぶん智恵もついたが，馬鹿にもなったということだ」とひどいことを言っている。「もし，悪の根源が断たれないなら，彼女の病気は発狂にまでいたるかもしれない」も突き放した言い方である。そもそもこの「悪の根源（корень зла）」とは何か。解釈の手がかりはないが，もしエリザベータの性格や体質のことではなく，レオンチェフ自身の遊蕩のことであるなら，積極的に「根源」を断とうとしない感じがにじみ出ている。

いずれにしてもこの1868年の前半の時点では，レオンチェフが自分の遊蕩に罪悪感を感じてはいないことを確認しておかなければならない。そして，激しい諍いの時期が訪れた（1869年，70年）。ではその時期にレオンチェフは自らの遊蕩をどのように感じていたのか。それを知る手がかりは少ないが，まず重要といえるものはこの節の最初に検討したグバストーフ宛の1869年10月15日付けの手紙である。われわれはそれをレオンチェフの精力（性欲）の衰えを嘆くものと解釈した。彼にこのエネルギーの低下をもたらした最大の理由として，妻との諍いを考えることは妥当であろう。しかし，ここで指摘しておかねばならないのは，この時点でもレオンチェフが決して自分の遊蕩に良心の仮借を感じてはいない，ということである。レオンチェフが嘆いているのは，２年前にグバストーフに勧めたような，心置きなく女遊びができた時期が終わるかも知れないという恐れによるものであった。この手紙に「何か罰するような手」の存在をレオンチェフが感じたとするコノプリャンツェフの解釈は，すでに指摘したように，後のことを知っている者の深読みであろう。

さらに「罰するような手」の解釈が行き過ぎであることを示す最新の資料がある。先に指摘した姪のマリヤ・ヴラジーミロヴナ・レオンチェフの思い出である。マリヤは一種の療養のためにレオンチェフの家で過ごしていた。そこでマリヤはレオンチェフの母宛の手紙をおそらく清書した。そしてその２通の手紙の写しの一部が思い出の中で引用されている。その一通1870年11月19日の母宛の手紙に妻についての記述がある。それによれば，妻は病気であること，症状は一定せず，

常に変わること，妻は自分を愛しているし，自分は彼女を誰よりも憐れんでいる（愛していると書いてないことが注目される），しかし，だからどうすればいいのか。どうしようもない。神が望むようになったし，これからもそうなるのです。さらに「私の存在は**彼女にとって**益をもたらさないし，彼女の苛立ちは私を働かせません（強調レオンチェフ）」。そして，働けなければ，妻の治療を含めて，現在のみならず，未来の彼女の物質的幸福にとって問題である。そして文学との関係については，こう書かれている。「少なくとも，どこでも私の作品は好んで印刷されています。もし，今年印刷されたものがそうなるはずのものより少ないとしたら，それは，私を**不毛**へと打ちのめした彼女の病気以外のいかなる理由でもないのです（強調レオンチェフ）」。そしてこの事態に対しては「私は年を経るに従ってあなたより謙虚になりました。だからこう言うのです。誰も悪くはない，**神が望むようになった**のです（強調レオンチェフ）」。この「神」は，回心後の神ではなく，「運命」とも読替えられるもので，単なるひとつの慣用的な表現であることを指摘しておきたい。また，その後に妻をオデッサか，そのあたりに療養にやることが書かれている。そして，自分の次の任地がロシアであることを強く望んでいる，と述べている。そうなれば，母にも妻にも会える。「彼女には罪はないのですから，私は長い間彼女に会わないことはできません」（すべての引用［Ⅵ (2)-101, 102］）。

さて，先に引用したストラーホフ宛の手紙の最後のものは，奇しくもこの母宛の手紙と同じ日に書かれた。書かれた相手との問題があるため，２通の手紙の比較からことの本質を読みとるのは極めて難しいが，以下のことが言えるだろう。

第一に，レオンチェフは自分が文学，あるいは文筆で立つことができない理由を母親にはもっぱら妻の病気のせいにして説明していることである。しかし，すでに見たようにレオンチェフはそれ以外に自分の文学的不遇を感じていたのである。第二に妻に対する罪の意識の問題であるが，母への手紙の引用部分の全体から見て，まだはっきりとした罪の意識は感じられないと言えるだろう。明確に「誰も悪くはない」，と述べているからだ。しかし，文学上の不遇な思いと併せて「神が望んだこと」の中に何かコノプリャンツェフがほぼ一年前のレオンチェフに見た「神の裁く手」めいたものが感じられるも事実である。今回の全集で初めて公刊された「我が人生の年代記」の1870年の部分に「リーザの病気悪化。私の熱病と憂鬱（トスカー）。**修道生活への最初の思い**（強調レオンチェフ）」（Ⅵ (2)-32）とあるのはこのことを物語っているのだろう。

以上を約めて言うならば，妻の発狂の兆しやそれに続く激しい諍いは，レオン

チェフを苦しめ，彼の精力を奪い（レオンチェフは，すでに見たように，このことをひどく悲しんだ），修道生活をふと思うほどに彼を追い込んだかもしれない。しかし，彼に深い良心の仮借を与え，大きな精神的転換をもたらす類のものではなかったろう，ということである。レオンチェフを苦しめていた最大のものは文学上の不遇な思いであった。

最後にレオンチェフの母の死の問題を検討しておこう。

5）母の死

レオンチェフの母フェオドーシヤ・ペトローヴナは1871年２月の末に亡くなった。母の死に対するレオンチェフの反応を直接的に示す資料は今のところ存在しない。最新の資料であるマリヤの思い出には，1871年２月６日付けの母宛のレオンチェフの手紙が引用され，それに加えて数行の記述がある。マリヤはこう書いている。フェオドーシヤは息子の手紙に返事を書く力はなかった。「彼女はすでに76歳であった。しかし，コンスタンチン・ニコラエヴィチは彼女の死を思ってもいなかった。彼は彼女にもう一度会うことをひどく望んでいた［Ⅵ(2)-105］」。これだけである。しかし，1869年に始まっていた熱病（既述）がきわめて悪化したことは事実であった。コノプリャンツェフはこう述べている。「熱病が彼をひどく疲弊させた。身にふりかかった様々な不幸が，彼が文学のみならず，すべてのことに従事することを妨げた」(注20)。回心はこの年の７月のことである。また，母フェオドーシヤの息子コンスタンチンに対する影響力の強さは明らかであったから，ここにレオンチェフの回心と母の死との関係が問題として浮かび上がってくることになる。

コノプリャンツェフ以後最も浩瀚なレオンチェフの伝記を著したイヴァスクはフェオドーシヤの死について言及した後に，レオンチェフと母親との関係について，こう述べている。

「レオンチェフと母の間には特別な関係があった。現在の心理学者が『エディプス・コンプレクッス』と呼んでいるものがある。おそらく，何かそれに類するものがあったと推測されるのである。しかし，それがすべてということでは全くない。レオンチェフには母に対する『恋着』といったものはなかった。もっとも彼は母を誇りに思い，見ほれていたのではあるが。（中略）。そこには他のものがあった。何か非常に単純であるが，訳の分からないもの，つまり，母親との肉体的な，形而上学的とさえ言いうるようなつながりの感覚があった。おそらく，彼の意識ではなく，彼の血が，彼の魂が決して忘れなかったのである。遠いクジノ

ヴォのどこかで母が縞の入った更紗が張られた自分の庵（別室）にいることを，あるいは，子供の頃に夜半の婚約者が通り過ぎた庭の小道を歩いているのを。しかし，誰にも本当の所は分からない」(注21)。

イヴァスクのこの指摘の後，数年して書かれたルカシェーヴィチのレオンチェフ伝はレオンチェフの思想の根源を端的に母親との関係に求めている。「レオンチェフの場合，彼の思想（イデオロギー）の内的論理は，彼の愛する母の死の後に彼が経験した強い感情的な苦悩の産物であった」(注22)。

さて，既述のマリヤの思い出に引用された２通の手紙からも，母の死の直前まで，母と子の間に強い絆があったことが窺われる。レオンチェフは引用された日付の古い手紙（1870年11月19日）では，「現在彼女（妻――引用者）のもとに母と姉（妹）が来ています（妻が病気なので――引用者）。しかし，もちろん彼女は自分自身の母よりもはるかにあなたを愛しています」などとお世辞めいたことを書いている。また，妻の発狂問題の所で指摘したように，自分の文学上の不遇を妻のせいにしている。つまり，母には自分の文学上の能力（成功の可能性）を高く見せたがっているのである。また，母への最後の手紙の末尾には，次のように書かれていた。「いつも変わることとのなかったあなたの感情にではなく，あなたが**頭と心で私の状況を理解している**ことに感謝します。手紙でそれが分かるのです。それは私の大きな喜びです（強調レオンチェフ）」［すべての引用Ⅵ(2)-101］。

「母親との肉体的な，形而上学的とさえ言いうるようなつながり（イヴァスク）」とまでは言えないだろうが，二人の間に強い繋がりがあったことは間違いないだろう。母の死がレオンチェフと彼の回心に与えた影響についてわれわれは多くを解釈することができる。イヴァスクやルカシェーヴィチの解釈も推測である。彼らも特別の材料を持っているわけではないからだ。われわれも，「心の最深部におけるショック」や「女を捜せ」という言葉から，様々な推測は可能である。例えば，本稿の筆者がレオンチェフの小説の検討から見いだした「恋愛への執着」は，レオンチェフの心に存在する，感覚的なもの，そしてその美への執着と女性（あるいは男性）の肉体とその美への嗜好，母性的なものへの回帰欲求とが混交したアマルガムとも考えられる（レオンチェフを救ったのが「生神女」であったこともこのアマルガムと関係があるのかも知れない）。そして，ヘーゲルが述べたように，あらゆる精神の病は精神の低次な段階への固執にあるとすれば，レオンチェフには皮膚接触とそれが拡大した感覚的なものへの固執（これが美的なものへの執着を生んだ）の原因が母親との関係にあったことも十分ありうる，と

いった推測も可能である。しかし，説得力のある論拠を示すのはおそらく難しいだろう。

以上まで「回心（神秘体験）」以前のレオンチェフの状態について，体調面での不調，精力の衰え，小説家，あるいは文筆家としての不遇な状況とそれに対する苦悩の思い，妻の発狂の兆し，母の死の４点から検討した。それらの検討が示していることは，この時期のレオンチェフがいわば人生の危機の段階，行き詰まりの状態にあり，なんらかの新しい方向性を見いださなければならない状況にあった，ということである。もちろん，危機が回心に繋がる必然性は全くない。回心といった特殊な人生の転換なしに新しい方向を見いだしていく場合が普通だろう。しかし，回心が極めて特殊な転換であったとしても，それが人生の転換の一形態であるならば，人生のこの時期にレオンチェフにそれが生じたことは，唐突でも，特に不思議であったとも思えないのである。しかし，そのあり方においてその転換は極めて不思議なものであった。それは言葉の真の意味で回心であった。

次に「回心」そのものとそれに付随する問題について考察しよう。

２．「回心（神秘体験）」の内容について

レオンチェフの「回心（神秘体験）」なるものの真の姿はどのようなものであったか。もちろん，それはレオンチェフの心の中で生じたことであって，彼以外の誰もそれを知るすべはない。というより，少なくともその原因については当時の彼自身もはっきり理解できなかった，というのが正しいだろう。ただ間違いのないことは，彼がこの回心後ただちにアトスに向かったことである。この事実は彼の回心体験の大枠を規定している。これからわれわれが試みるのは，その枠の内側での考察である。

さて，回心の状況に関する資料は，すべてレオンチェフ自身が書き記したことと，それについて彼が第三者に語ったことから成っている。前者としては，レオンチェフが晩年（1891年８月13，14日）にローザノフに当てて回心についてかなり詳しく書いた手紙がある（その他にそれについて簡単に触れた手紙がある）。レオンチェフ研究における回心についての記述はほとんどすべてこのローザノフ宛の手紙に基づいている（それ故，既に述べたように，本論の末尾に付録として訳出した）。従って，もし回心についての他の資料がなかったならば，回心の状

況はこの手紙の記述に確定されていたろう。しかし，問題なのは，この一級資料以外に，親しい第三者にレオンチェフが語った内容がその第三者によって記述されたものが存在し，さらにそれらが互いに細部において異なっているということである。ここにどの資料が回心の実態をより正しく伝えるものであるかという回心についてのいわば「真理」問題が出てくる素地がある。しかし，この問題は長らく看過され，問題として提議され，本格的に検討されたのは比較的最近のことであった。2000年にD.M. ヴォロジーヒンが『高慢な変人，コンスタンチン・レオンチェフの哲学と生涯』(注23)でそれを行った。本章ではヴォロジーヒンの研究をもとにレオンチェフの回心の内容を考察し，その問題点を指摘したい。

ヴォロジーヒンは，ローザノフ宛の手紙以外に，「人民の意志」党指導者から保守主義者に転じたL. チホミーロフ，教会作家E.N. ポゴージェフ（ポセリャーニン），レオンチェフの親しい友人K.A. グバストーフの証言（回想）と，レオンチェフの最初の伝記を書いたコノプリャンツェフの記述（コノプリャンツェフは伝記を書く際に上記以外の者以外のレオンチェフの関係者から話を聞いており，特殊な情報を得ていた可能性がある）を比較し，その相違について詳しく考察している。そして，その作業の結果，回心の基本的な事実を確定し，記述が相違する点で特に重要なものを取り上げ，そのことについて自らの仮説を提出している。そこで，まずヴォロジーヒンが確定した内容を紹介したい。少し長いが全文訳出する。

「何が疑いないことなのか。1871年７月――この月は外交官であったという外的状況によって確定されている――レオンチェフはコレラが猛威を振るっていた農村地域に滞在し，ひどい病に罹った。病の発作があまりにも激しいので，彼はすでに回復の望みを失っていた。彼の部屋にある生神女（聖母）のイコンがあった。レオンチェフは田舎で偶然の病で死にたくなかった。終わりそのものが彼を脅かしたのではなく――彼は恐らく勇敢な人であった――無意味に浪費された人生が彼を脅かしたのである。彼はかくもいまいましい状況に腹を立て，もはや何もそれを変えることができないのではないか，と思った。怒りと絶望の中でレオンチェフは生神女を非難し，また祈った。死ぬのは早すぎます。これは間違いです。救ってください。もし天の力が自分を救ってくださるなら，信仰篤い正教徒，いや修道士にでさえなります，と誓った。じきに，病は完全に癒えた。呼ばれた医者の措置も余計なものであった。体験した衝撃の結果，レオンチェフは修道士になるために実際にアトスに向かった。そして彼の世界観はまったく変化した。

英雄的な快楽主義は基本的な軸としての地位を失い，その替わりに宗教性が軸として徐々に確立され始めたのである」(注24)。

次に，基本的部分から省かれた各証言の相違部分（ニュアンス）についてである。ヴォロジーヒンは相違部分の検討を主に以下の４点に関して行っている。１）イコンの出所はどこであったのか，２）病気は何であったのか，３）レオンチェフはイコンに何を祈ったのか，４）阿片は存在したのか。この４点は絡み合って「回心」体験を構成するいずれも重要な問題であるが，紙幅の関係もあるので，簡単にその問題性のみを指摘しておきたい。

まず，病気であるが，コレラではなく一時的な胃腸の不調である可能性が指摘されている。コレラでなければ，この神秘体験の奇跡的性格は弱められることになる。コノプリャンツェフを初めとして，ベルジャーエフ，イヴァスクといったレオンチェフ研究の泰斗がこの見解を採っている。コレラがそんなに簡単に直るわけがないし，奇跡も起こらないという立場である。もちろん真実は不明である。

次にコレラの問題と関係して「阿片」の存在の問題がある。レオンチェフは実際にコレラに罹患したが，阿片を服用し（レオンチェフは医者であったため適切な服用量を知ることができた），深く寝込むことで平癒したという説である。この場合生神女の奇跡はレオンチェフ自身が忘れていた阿片を示した点に求められる。チホミーロフ説――ヴォロジーヒンに従ってこう呼ぶ（以下の「説」も同様）――のみがこの立場である。他の説には阿片についての記述はない。真実は不明である。

第３に，祈りの内容についてであるが，そこでの問題性は，死の恐怖の際にそれ以前の生活に対する明確な「罪」の意識があったかどうかであろう。ローザノフ説では，レオンチェフは，何も成し遂げていない自分に死が早すぎることを訴えており，チホミーロフ等の説では，以前の罪深い生活への懺悔が含まれている。グバストーフ説では，興味深いことに，レオンチェフは美学的立場から散文的な死を恐れた，とある。これまた真実は不明である。

最後にイコンの出所についてである。

ローザノフ説では，「一人の修道士が私の所にアトスからもってきた」ものであり，チホミーロフ説では商人がもたらしたものである。ポゴージェフ説ではレオンチェフが大事にしてきた家のイコンであり，グバストーフ説では「アトスの保護者，生神女」の記述のみであり，またコノプリャンツェフ説では，アトスの複数の修道士の贈り物である。イコンがどこからもたらされたか。不思議な回心

体験においてレオンチェフが生神女に誓った，修道士にもなる，という言葉，そして，実際に彼はしばらくしてアトスに旅立ったのであるから，その言葉はアトスへ行くことを意味していたと思われる（ローザノフ説ではアトスに行くことが明言されている）が，このレオンチェフの後の運命を決定した「アトス行き」がアトスからのイコンによって喚起された可能性がある，というのである。

上記の４点についてヴォロジーヒン自身の仮説を紹介しておこう。

レオンチェフの病は実際にコレラであった。医者であった彼がこの点を誤るわけがない。阿片は存在したと思われる。ローザノフ宛の手紙でこの事実を隠したのは，彼にとって大切なこの不思議な体験の神秘性への疑いを喚起させたくなかったからである。また，レオンチェフがイコンに祈ったのは，今死にたくないということのみであった（つまり，その時点ではそれ以前の生活を悔いていない）。突然のアトス行きの誓いはアトスからのイコンによって誘発された。

すでに何度も指摘したように，今回の全集では，レオンチェフの姪の M.V. レオンチェフの思い出が手稿に即して刊行された。このマリヤの「思い出」を読むと，以下の２点が分かる。１）おそらく，コノプリャンツェフはマリヤから証言を得ている。２）当時21歳であったマリヤはレオンチェフの精神に入り込むような洞察力をまだ持っていなかったし，レオンチェフも彼女には心の内を語っていない。そのため，レオンチェフの精神に深く踏み込んだ解釈はこの手稿には書かれていない。実際，マリヤ自身こう述べている。「私は当時若かった。そして，その若さゆえ，多くの，恐らくかなり重要なニュアンスが私の散漫な注意力の外へ滑り落ちてしまったことだろう。しかし，いずれにせよ私，私一人だけがレオンチェフの外面的，内面的生活のすべての側面を同時に見る目撃者であった［Ⅵ(2)-88］」。実際，手記を読むと，レオンチェフが語ったことや，事実関係についての記述には一定程度の信頼が置けると思えるのである。

このマリヤの手記からレオンチェフとアトスとの関係でいくつかの重要な事実が浮かび上がってくる。外面的には瑣末なことに思えるこのことは重要な意味を持っている。この点については後に述べる

まず，第一は，「ここ（サロニキ――引用者）でコンスタンチン・ニコラエヴィチは初めてアトスの修道士たち，特にロシア人の修道院であるパンテレイモン修道院の院長であるマカーリー・スシコフ師と知り合った」[Ⅵ(2)-106]。レオンチェフがサロニキに移ったのは回心の３カ月ほど前のことである。

第二に，「われわれの別荘（サロニキにある――引用者）にアトスからギリシャ人の修道士たちがやって来るようになった（私は彼らの会話を覚えている）。ま

た，アトスからロシア人聴悔司祭もやって来るようになり，彼は何度かコンスタンチン・ニコラエヴィチをアトスに招いた。コンスタンチン・ニコラエヴィチはどういう訳かそれを延期していたが，ある時数日の予定でアトスに向かったが，途中で引き返した。熱病の発作を感じたからだ」[Ⅵ (2)-107]。

第三は，「イコン（回心の際にレオンチェフが祈ったイコン――引用者）はアトスからギリシャ人修道士たちが持ってきた」[Ⅵ (2)-108]。

第四に，「彼（レオンチェフ――引用者）はこの病気は，彼がこの時まであのような聖地を訪れなかった罰であると考えたがった」[Ⅵ (2)-108]。

コノプリャンツェフの伝記には，上記の第四の点を除く点が記されている。おそらくコノプリャンツェフはマリヤから話を聞いていたと思われる。

さて，ヴォロジーヒンに戻ろう。なぜ彼はイコンの出所に拘ったのか。ヴォロジーヒンはレオンチェフの回心についてのいくつかのバリアントを検討する過程でイコンの出所に関する異同を発見し，それを考察した。その結果，イコンはアトスからもたらされたようで，「聖山の老師のところに赴くという考えは，教会と関係のなかった者にとっては普通の考えではなかった。それは聖山からちょうど持ってこられたイコンによって引き起こされた可能性がある」(注25)と結論した。そして，その問題についてもはや考察を加えていない。われわれはこの問題の考察においてにさらに重要な一歩を進めることができるように思う。というのは，バリアントの比較によってヴォロジーヒンがもたらした結論に加えてマリヤの証言から，レオンチェフの運命を変えた回心が，回心以前のほんの数カ月間にもたらされた極めて偶然的な出来事によって引き起こされた可能性を示唆するからである。われわれはすでにコノプリャンツェフのいう「神の罰する手」が後のことを知る者の深読みであることを指摘した。実際，虚心坦懐に眺めてみれば，回心以前のレオンチェフの数十年間の生活の中で宗教・信仰と結びつくようなものは，上記のマリヤの思い出に記されることぐらいしかなかったのである。また以下（次号連載分）で詳しく検討されるが，回心以前のレオンチェフの文学・思想において彼が宗教や信仰に特に関心をもっていた気配は全くないのである。そしてこのことは先の可能性をさらに強めるのである。しかし，このことについては本論の最後の部分（次号掲載分）で検討しよう。

最後にヴォロジーヒンの問題提議に対してわれわれは以下のように答えておきたい。

第一に，コレラと阿片の問題は詮索しても結論は出ないだろうし，レオンチェフの回心を問題とする際の重要問題ではない（レオンチェフがそれを奇跡とみな

したことだけが意味がある)。第二に，罪の自覚の問題では，ヴォロジーヒンの結論と本稿での検討の結論は一致した。つまり，レオンチェフは回心以前に罪の自覚といったものはほとんど持っていなかったのではないか。第三に，イコンの出所問題は重要であり，その検討はレオンチェフの回心が極めて偶然的なものによってもたらされた可能性を示唆している。

レオンチェフ研究の深化によって，レオンチェフの「回心」にいたる経過，またその「回心」についてわれわれは以前に比べてより詳しい知識を得ることになった。当該の時期レオンチェフには，なんらかの転換が必要であった。その転換を促す内的な圧力に「回心」が応えたことは事実であった。また，それが宗教的な方向をとったことは，神意によるものと考えないならば（レオンチェフ自身はそのように考えた)，極めて外的な偶然がそれを導いた可能性が高い。いずれにせよ「回心」は起こり，レオンチェフの運命は大きく転換したのである。以下では，思想・美学的見解の変化・形成の過程をたどることで，「回心」の意味をさらに考察することにしよう（次号の紀要に続く)。

≪注≫

1．2007年のあるロシア人研究者の指摘によれば，論文等を含めれば，毎年「数十の研究」が発表されているという。Хатунцев, С.В., “*Константин Леонтьев интеллектуальная биография*”, СПб., 2007, с.6
2．筆者が知る範囲では，近年わが国においては，筆者以外に，早稲田大学教授，高野雅之氏，神戸市外国語大学准教授，清水俊行氏にレオンチェフ研究の業績がある。
3．上記の高野教授が研究の一部を纏められた。『ロシア「保守反動」の美学，レオンチェフの生涯と思想』，成文社，2007年
4．Коноплянцев, А., ‘Жизнь К.Н.Леонтьева’, “*Памяти К.Н.Леонтьева 1891г. литературный сборник*”, СПб., 1911, с.73, 74
5．Там же, с.74
6．“*Константин Леонтьев Избранные письма 1854–1891*”, СПб., 1993, с.68
7．Коноплянцев, ‘Жизнь’, с.72
8．“*Избранные письма*” с.65
9．拙論「恋愛への執着――K. レオンチェフ小説論（2）――」，『ロシア思想史研究第３号』［科研課題番号15320035］，2006年）
10．Коноплянцев, ‘Жизнь’, с.73
11．“*Избранные письма*” с.109
12．Там же, с.66

13. Там же, с.66
14. Там же, с.68
15. Там же, с.77, 78
16. Там же, с.60, 61
17. Там же, с.284
18. Там же, с.403
19. Там же, с.59, 60
20. Коноплянцев, 'Жизнь', с.72
21. Иваск, Ю.,"*Константин Леонтьев, Жизнь и творчесво*", Peter Lang Frankfurt/M., 1974, с.393
22. Lukashevich, S., "*Konstantin Leontev, A Study in Russian 'Heroic Vitalism'*", New York, 1967, p.14
23. Володихин, Д.М., "*Высокомерный странник" Философия и жизнь Константина Леонтьева*", Москва, 2000
24. Там же, с.37, 38
25. Там же, с.39

≪付録≫「回心」について書かれたレオンチェフのローザノフ宛の手紙（"*Константин Леонтьев Избранные письма 1854–1891*", СПб., 1993, с.586–588）

1891年８月13，14日付けオプチナ修道院からの手紙の「回心」について述べた部分。レオンチェフの死は同年11月12日のことであり，この手紙はローザノフ宛の最後から２番目の手紙である。最後の手紙（同月20日付け）はごく簡単な記述であり，実質的にこの手紙がローザノフ宛の最後の手紙である。余命がもう長くないことを感じていたレオンチェフが自分の生涯における最も深い体験についてローザノフに書き残しておこうとしたものであろう。

なお，最終パラグラフ（下線の部分）は，上記のロシア語で表記した『コンスタンチン・レオンチェフ　書簡選集　1854年から1891年』において，省かれた部分（理由は不明）を，ローザノフが自分で受け取ったレオンチェフの書簡を刊行した書簡集（"*Константин Леонтьев Письма к Василию Розанову*", Nina Karsov, London, pp.109–112）によって補って訳したものである。

読みやすくするために原文にない段落をおいた。その際その部分にアスタリクスを打った。（　）内はレオンチェフ自身の注，［　］内は訳者の注である。

「あれ程うまく行っていた外交官としてのキャリア（ゴルチャコフ公爵の対応

やイグナチエフの約束から判断すれば，本当に最後の時まで極めてうまく行っていたキャリア）を私に捨てさせ，修道生活を考えさせたものは何か。このことについて説明して欲しいというあなたの求めに対する答えとして，私はまず以下のアフォリズムを掲げましょう。「生半可な公開や舌足らずな説明は，完全な沈黙よりも，他人の生活に対する正しい理解をはるかに妨げる」。さらに手紙ではこのことについてすべてを完全に打ち明けて書くことはできません。もし神が私たちを最後に会わせてくださって，口で言えるなら話は別ですが（このことを私はあきらめてはいません）。しかし，とにかくやってみましょう・・・。

＊多くの理由が一度にやってきたのです。心の理由や知的な理由やそして最後にあの外的な，そして見かけでは（そう見かけだけのことですが）偶然的な，そう，その人自身にとって明確な内的な変貌よりしばしば高度の神意がはるかによく現れることになる，あの偶然的な理由があったのです。確かに，これらすべての理由の根底には，すでに1870年，71年当時２つの前提があったと思います。つまり，ひとつは，最新のヨーロッパ的生活の精神と形態（ペテルブルグ，文学的な月並みさ，鉄道，背広とシルクハット，合理主義等）に対する長期に渡る（1861，62年以来の）哲学的な憎悪，さらにもうひとつ，つまり，正教の外的な諸形態に対するなにか美的で子供じみた忠誠，の２つです。これらにさらに，心の最深部におけるショックという衝撃が加えられるでしょう（あなたはフランス語の“Cherchez la femme”という格言を聞いたことがあるでしょう。生活のいかなる真面目な事柄においても『女を探せ』ということです）。そして最後に，最も危険で思いがけない病気という外的偶然（1871年）とその時に死んでしまうという恐怖がありました。当時はまだ三位一体の仮説（注１）も『オデッセイ・ポリフロニアデス』（私見によれば，私の多くの文学作品の中で最良の作品）も思いついたばかりで書かれていなかったのです。また「東スラヴ人」のヨーロッパ主義と野蛮についてもまだ何も告発していなかったのです。この告発こそ私自身が自分の歴史的な貢献であると断固として見なしているものなのです（カトコーフ自身はこの危険性を理解していなかったか，あるいは，彼に固有な楽観主義か，あるいは狡猾さによって，その危険性を指摘したくなかったのです）。ともかく一言で言えば，すべて［私にとって］重要なことは1872，73年，つまり，アトス訪問と個人的な正教への情熱的な転換以降になされたのです・・・。どういう訳か，40歳の時突然に個人としての信仰が出来上がり，また，［それに続いて］私の政治的，文学的な修行も完了したのです。このことは今に至るまで私を驚かせ，また私にとって神秘的で理解しがたいことなのです。

＊さて，サロニキの領事であった1871年の夏，思いがけない死の恐怖（コレラの強い発作）にとらわれ，ソファーに横たわっていた私は（一人の修道士が私の所にアトスから持ってきたばかりの）生神女のイコンを眺めていました。私はこういったこと［つまり，その後最良の作品が書けるとか，精神的に成長するといったこと］はまだ予想できませんでしたし，私の文学作品のプランも非常にぼんやりしたものでした。私はその時魂の救いについて考えていたのではありません（なぜなら私自身の個人的な不死への信仰よりも個人的な神への信仰の方がはるかに容易く与えられていたからです———注２）。普段は全く臆病でない私が，ただ肉体的な死への思いからだけ，恐怖にとらわれたのです。そして（すでにお話した）一連の他の心理的な急激な変化や共感や嫌悪によってすでに前もって用意のできていた私は突然，直ちに，この生神女の存在と威力を信じたのです。まるで自分の前に，生きている，知り合いの，本物の女性，それも善良で力強い女性を見ているかのように，しっかりとはっきり感じとれるように信じたのです。そして叫びました。『生神女様，早すぎます，私は死ぬには早すぎます。私は自分の能力に見合ったことをまだ何もしていません。そして，非常に堕落した，手の込んだ罪深い生活を送ってきました。どうか私をこの死の国から引き上げてください。私はアトスに行きます。そして，長老様方が私を聖水曜日や聖大金曜日や奇跡を信じる素朴な本物の正教徒にしてくださるように，彼らに跪きます。剃髪して修道士にでもなります』。

２時間後私は回復していました。医者が現れる前にすべては終わっていたのです。３日後私はアトスにいました。長老たちは，私が直ちに剃髪するのを思いとどまらせました。しかし，私はすぐに正教徒となり彼らの指導のもとに入ったのです・・・。正教会に対する私のロシア的，美的な愛にさらに「聖大金曜日や聖水曜日」の告解によっても不足していたもの，つまり罪への恐れ，罰への恐れ，神への恐れ，霊の恐れが加わる必要があったのです。この霊的な恐れが達成されるために私の驕りは２時間だけですが肉体的な（そして，侮辱的な）恐怖を体験しなければならなかったのです。この体験の後，私は驕りを捨て，直ちにすでに述べたような高次な偶然性の目的論［様々な偶然が目的を持つこと］を理解したのです。肉体的な恐れは去りましたが，霊的な恐れは残りました。そしてその時以来，私はたとえ自分が望んだとしても，信仰と主への恐れを拒否することは出来ないのです・・・。宗教は必ずしも慰めにはなりません。多くの場合それは思いくびきであり，真に信仰する者はいかなるもののためにもそのくびきからは離れられないのです。そして，その者はすべての疑い，宗教にとって不都合なすべ

ての理屈付けを，うるさい蝿を追い払うように，憎しみと軽蔑をもって自分から簡単に払いのけてしまうでしょう・・・。

この1871年から72年の転換後に何があったか，このことについてここで語ることは出来ません。40歳から60歳までのこの20年間，私は成熟の前半の20年（20歳から40歳まで）とは全く異なった生き方をしてきました。前よりよくなった，より罪のない生活とは言いませんが，ただ前とは異なって，全く別の基盤に立ち，より深く，より満たされて生きたのです・・・。私の最良の，独創的なものはすべて（アトス以後の）この20年間に書いたものです・・・。

今回はこれ以上あなたにお話しすることはできません。」

注１：「三位一体の仮説」：全有機体の生から死への発展過程のみならず，人間が創造したすべての文明・文化（哲学，芸術，歴史，社会組織等）の発展過程に存在するという法則に関する仮説。『ビザンチズムとスラヴ諸民族』に以下の内容が述べられている。「三位一体の仮説」によれば，それらの発展過程は，(1) 原初的な均質性が全体にも部分にもいきわたっている単純さの時期，(2) 複雑さが増し，全体も部分も個別化されると同時に「形態の専制的統一」によって統一されている「花開く複雑性」の時期，(3) 部分が均質化し，形態の統一力も弱まる融解状態であるところの「第２の単純化」の時期，の３つの時期（段階）を経る，という。

注２：奇妙な文章である。当時すでにレオンチェフに個人的な神への信仰が与えられていたとは思えないからである。